

舞鶴市志高遺跡の石鋤

肥 後 弘 幸

2021 8月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

舞鶴市志高遺跡の石鉞

肥後弘幸

1. はじめに

志高遺跡は、舞鶴市志高に所在し、由良川の河口から約10km上流の左岸に立地する縄文時代から江戸時代に至る複合集落遺跡である。建設省が行う由良川の河道拡幅事業に先立って、昭和56年度から昭和61年度にかけて、舞鶴市教育委員会と財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター（以下「府埋蔵文化財センター」と表記）によって発掘調査が実施された。

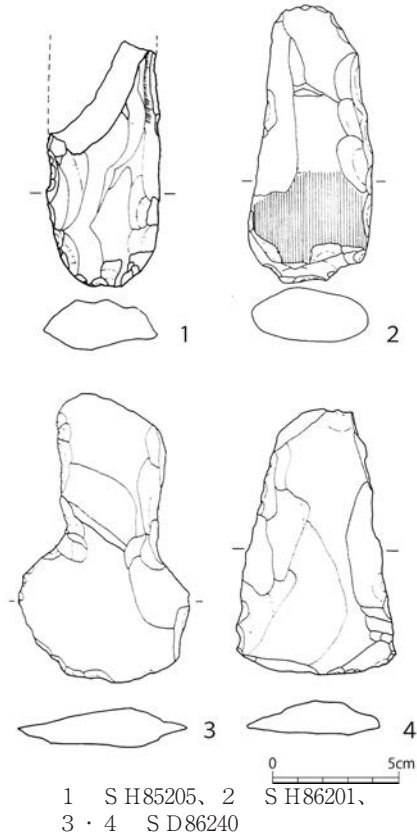
由良川は、兵庫県円山川、鳥根県江川とともに山陰型河川の特徴を示し、その中流域では綾部・福知山盆地等の小平野を形成するものの、下流域では平野を形成しない。下流域では狭い谷を極めて緩やかに流れる。降雨量の多い季節には、上中流域の広大な流域面積からもたらされる大量の水がこの狭い谷に押し寄せるため、しばしば大洪水を起こし、水とともに運ばれた土砂により蛇行部の内側に狭長な自然堤防を形成している。平野が発達しないことから古代の人々は生活の場を自然堤防上に求めている。周辺には弥生時代の遺跡として、上流側に八雲遺跡、大川遺跡、下流側に地頭遺跡、桑飼上遺跡がある。志高遺跡では、地表下3



1 志高遺跡、2 桑飼上遺跡、3 地頭遺跡、
4 桑飼下遺跡、5 八雲遺跡、6 大川遺跡、
7 三河宮ノ下遺跡、8 石本遺跡、9 興・観音寺遺跡、
10 ケシケ谷遺跡、11 青野遺跡
第1図 由良川中下流域の主要な縄文・弥生遺跡

m～7mの位置に縄文時代前期から弥生時代中期に至る包含層が残されていた。

弥生時代中期の志高遺跡は、北東から南西方向に延びる自然堤防上に100mほどの範囲にわたって竪穴住居からなる居住域を形成し、下流側に方形周溝墓からなる墓域を、上流側に方形貼石墓からなる墓域を形成している^(注1)。水田等の生産域の所在は不明である。府埋蔵文化財センターが調査した居住域からは弥生時代包含層を中心に同時代の遺物が300箱ほど出土しており、石器類も408点(用途のわかるものに限る・以下各遺跡も同じ)出土している。その内訳は、磨製石剣23、磨製石鋤9、打製石鋤50、太形蛤刃石斧43、扁平片刃石斧15、柱状片刃石斧7、小形石斧2、環状石斧2、石鋤32、石錐10、刃器2、敲き石・磨石37、砥石143、玉工具18である。弥生時代の集落遺跡は、集落ごとに石器組成が異なる傾向にあり、志高遺跡では伐採具である太形蛤刃



第2図 志高遺跡出土の石鋤(S = 1/3)

石斧が多く、石包丁がないことに加えて石鋤が多いことが特徴である。石鋤は打製石斧と称されることもある。必ずしも鋤の用途は持たないが、農具であるという実体に即し、本稿では石鋤と表記する。

2. 志高遺跡の石鋤と弥生時代の石鋤

(1) 志高遺跡の石鋤

府埋蔵文化財センターの調査では、居住域から29点の石鋤が、下流側の墓域の下層から3点、計32点の石鋤が出土した。いずれも、粘板岩もしくは珪質頁岩の薄い板状の石材を割り出して短冊形(第2図1・2)、撥形(同4)及び有肩形(同3)に加工したものである。短冊形のものは、上流3kmにある桑飼下遺跡出土の縄文時代後期の打製石斧とほぼ同形同大のため調査当時縄文時代のものではないかとの意見もあったが、竪穴住居内(第2図1、2ほか)から出土するものが3点あり、弥生時代の石器と判断し、石鋤として報告した。これらは先端部の磨滅が著しいこと、1のように折損しているものが多いのが特徴的であ

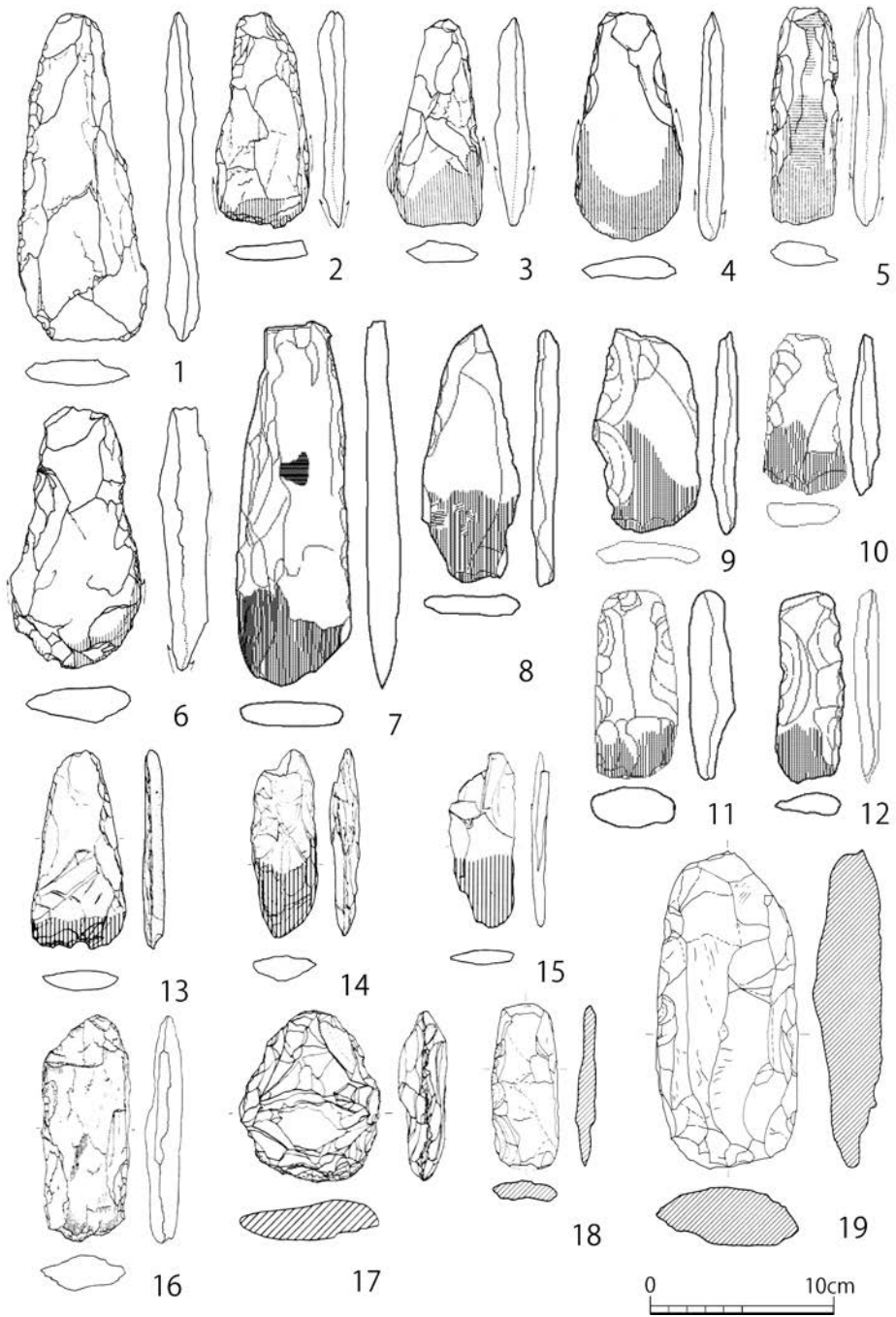
る。S H86201の埋土下層から出土した2は、先端が使用によりつぶれ・磨滅するものの全長11.0cm、幅5.0cm、厚さ2.6cm、重さ100gを計る。撥形の3、有肩形の4は、方形貼石墓からなる墓域の下層の溝、S D86240から出土したものである。S D86240は、弥生時代中期中葉に埋没した幅5m、深さ1.5mの溝で、溝内からは中期中葉の土器に混じって縄文時代後期の土器片、縄文時代の石鋏、弥生時代前期の土器片が出土している。3・4については、溝内から別に2同様の短冊形の石鋏の先端片も出土しており、それに比べて先端部の磨滅がみられないこと、短冊形と形状が異なることなどから弥生時代のものでなく縄文時代のもので報告したが、現在は、弥生時代中期中葉の石鋏と考えている。なお、3は、全長11.3cm、幅6.7cm、厚さ1.8cm、重さ107.1gを、4は、全長10.5cm、幅6.2cm、厚さ1.3cm、重さ93.7gを測る。いずれも、石材は粘板岩もしくは頁岩である。

(2) 研究史からみた弥生時代の石鋏

神村透は、『弥生文化の研究』^(註3)の中で、石製耕作具は、土を耕す土掘具と除草のための土掻具に大別され、土掘具には石鋏と有肩石斧I型があるとした。石鋏は全国各地で見られ、特に南信濃に多く、中期初頭から後期末まで存在する。有肩石斧I型は、全国的に見られるが、南九州に集中し、この地では中期中葉に盛行し後期も少しあるとしている。神村氏の分類に従うと志高遺跡出土の第2図1、2、4が石鋏に、3が有肩石斧Iに該当する。氏は、「石製耕作具のほとんどが打製品であり、形態的にみると石鋏は縄文時代の打製石斧と全く同じである。その点佐原眞が^(註4)いうように縄文時代の伝統を引くものといえる。有肩石斧I・II型や靴型石器はその形態を縄文時代にみることはできない。大陸や台湾に、畑作用の耕作具として同じ形態の石器をみることはできる。」としている。

平井勝は、石鋏とは平面形が短冊形、撥形、分銅形などを呈し、長さ10～20cm余りの扁平な打製石斧^(註5)とする。九州東南部で有肩形が特徴的に分布するとしている。早期には縄文晩期に引き続き多く、形は短冊形と撥形があるとし、前期には減少して近畿にはほとんど見られないとしている、中期になると丘陵や段丘の発達した地域で盛行し、水稻農耕が盛んな平野部ではほとんどみられない。盛行する地域は、九州の東南部、火山灰の発達した丘陵や山岳地帯、岡山県北部や島根県・鳥取県そして長野県南部の天竜川沿いの段丘地帯を挙げている。

設楽博己は、群馬県藤岡市沖II遺跡(弥生前期)遺物包含層出土の大形の打製石鋏、弥生中期前半と後期の同安中市中野谷原遺跡の出土例、縄文後・晩期の同藤岡市谷地遺跡及び弥生後期の同吾妻町諏訪前遺跡の例を検討した。^(註6)結果、短冊形の打製土掘具は刃の幅を変えずに激減するのに対して、撥形のそれは増加傾向の中に石材を頁岩やホルンフェルス(谷地)から凝灰岩(沖II)、そして粘板岩(中野谷原)へと扁平な素材を取りやすいように変化



1～6 桑飼下遺跡、7～12 志高遺跡、13～15 桑飼上遺跡、16 青野遺跡
17 途中ヶ丘遺跡、18・19 寺岡遺跡

第3図 京都府北部の縄文時代、弥生時代の石鍬(S = 1/4)

させつつ大型化していく傾向を示した。また、別稿では、短冊形の石鍬は縄文時代以降変化せず、同じ方向に柄を付け、地面を深く掘るのに適している。撥形の石鍬は大型化を果たし、柄を鍬のように付け地面を幅広く掘り起こし、搔くのに適している。としている。^(注7)

3. 桑飼下遺跡出土の打製石斧

志高遺跡の上流、対岸2kmにある桑飼下遺跡は、建設省近畿地方建設局が行う由良川の河道拡幅に伴い、志高遺跡の調査開始に遡る8年前、昭和48年に約2200㎡の発掘調査が、平安博物館によって実施された。^(注8)

縄文時代後期の炉跡48基及び埋甕などが検出され、縄文土器と多くの石器が出土した。出土石器の総数は1131点で、その内訳は打製石斧942、石皿16、磨46、叩き石35、石鍬53、石槍1、切目石錘52、有溝石器2、礫石錘21、磨製石斧36、砥石10、削器13、石錘4である。^(注9) 打製石斧が異常に多いことが注目される。

942点の打製石斧については、形状から短冊形と撥形に分類されているが多くが短冊形である。第3図1～6は、報告書に図化された短冊形の実測図から任意に抜き出したものである。付表1に石材と各法量について記した。1は、大形のもので、全長17.8cm、重さ200gを計る。2は、泥質砂岩で11.6cm、85gを計る。3は、2とほぼ同大のものだが、凝灰岩製のため重量は60gと軽い。4は全長12.4cmを計る撥形、5は同11.9cmを計る短冊形をし、いずれも先端部の磨滅が顕著である。5は、中位に装着に伴う横方向の擦痕が認められる。6は、撥形で先端部が幅広のため重量は200gを計る。200gもの重量をもつものは少ない。これら6点を含む完形品351点の長さ及び重量の平均値は、12.2cm、97.3gである。石材別に計測値を求めると、粘板岩267点では、12.3cm、101g、凝灰岩61点で

付表1 縄文石鍬と弥生石鍬の比較

桑飼下遺跡（縄文時代後期）

	1	2	3	4	5	6
石 材	粘板岩	泥質砂岩	凝灰岩	粘板岩	粘板岩	粘板岩
長さ (cm)	17.8	11.8	11.3	12.4	11.9	14.3
幅 (cm)	7.1	5.1	5.3	5.9	3.7	7.1
厚さ (cm)	1.5	1.5	1.9	1.5	1.6	2.9
重さ (g)	200	85	60	120	85	220

志高遺跡（弥生時代中期後葉）

	7	8	9	10	11	12
石 材	粘板岩	粘板岩	粘板岩	粘板岩	粘板岩	粘板岩
長さ (cm)	19.4	14.1	11.2	8.8	7.6	10.3
幅 (cm)	5.8	5.4	5.9	4.7	3.8	4.6
厚さ (cm)	1.9	1.4	1.5	1.5	1.3	2.5
重さ (g)	253	88	75	48	-	120

は11.6cm、75.1g、泥質頁岩17点では12.6cm、117.3g、結晶片岩4点では、12.1cm、104.5gとなる。

7～11は、志高遺跡居住域出土の粘板岩製の完形の石鍬である。7は、最大のもので全長19.4cm、253gを計り、8は、全長14.1cm、9は11.2cmを計る。第2図の2もほぼ同大である。10、11は、やや小ぶりで、12は、120gとやや重い。これら6点は、桑飼下遺跡の打製石斧6点とほぼ同大であることがわかる。形態的には、志高遺跡出土の石鍬に比べ桑飼下遺跡出土のものの方が基部が細く撥形に近い傾向を示す。なお、実測図上では、前者が後者に比べて加工度が高いように見えるが、これは、実測図の書き手の違いによるもので、実際的には単体では区別がつかないほど良く似ている(写真)。

第4図は、打製石斧・石鍬の全長を縦軸に、重さを横軸に記した分布図である。志高遺跡の完形の石鍬12点の法量の平均値は、全長11.9cm、幅4.8cm、厚さ1.6cm、重量89.5gである。また、桑飼下遺跡粘板岩製の打製石斧267点の平均値は、全長12.3cm、幅4.7cm、厚さ1.7cm、重量101.0gである。

志高遺跡の完形資料12点(いずれも粘板岩)は、桑飼下遺跡の粘板岩製打製石斧完形267点の法量分布の中にすっぽり収まってしまふことがわかる(第4図)。このことから、志高遺跡出土の石鍬は、桑飼下遺跡出土の打製石斧と用途を同じくするため、偶然にも同一法量で製作されたものと考えられる。桑飼下遺跡出土の打製石斧は、先端部の磨滅状況、上

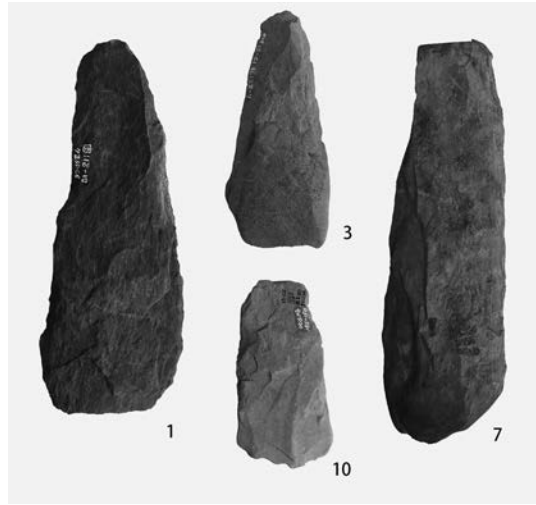
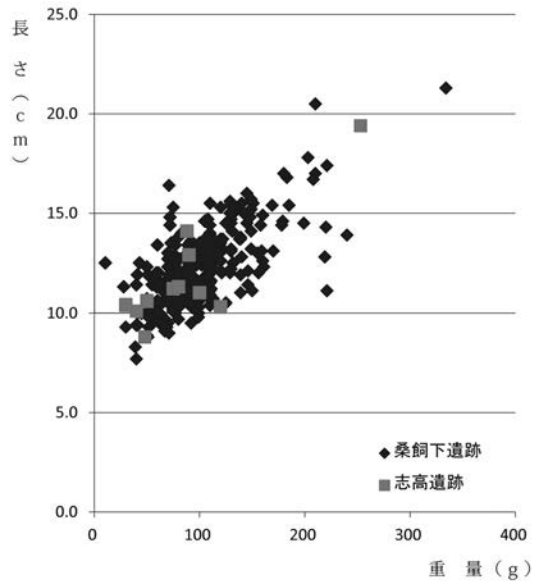


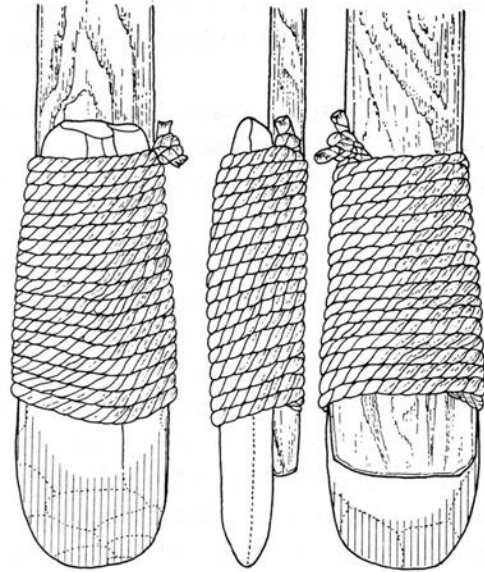
写真 桑飼下遺跡の打製石斧(1・3)と志高遺跡の石鍬(7・10)の石鍬



第4図 両遺跡の粘板岩製石鍬の法量分布

半部を中心に部分的に認められる擦痕から第5図のように装着方法が考えられており、土を掘るための鋤として利用されたと記されている。

志高遺跡の石鍬は、平均重量が100g未滿と軽量のもが多く、実際に直交する柄を付けて、鍬として利用することは、その大きさ、重量からみても効果は疑わしい。現在流通している金属製の鍬の刃先の全長は19~27cm、刃先幅は9~14cm、重さは600~300gほどである。弥生時代の木製の鍬先となると、さらに大形となる。草刈りなどに使われる片手鍬の刃先としての利用ならば可能だろうが、やはり桑飼下遺跡で検討された(第



第5図 桑飼下遺跡出土打製石斧の着柄想定図
(注8文献より)

5図)ように鋤先として理解することが妥当であろう。弥生時代の石器として石鍬は、鍬と表記されるが、軽量のもが含まれ、これらは鋤先としての穴を掘る道具として利用された可能性が高い。志高遺跡、桑飼下遺跡ともに由良川下流部の砂や粘土の堆積で形成された自然堤防上に立地する。志高遺跡の先端部が磨滅した石鍬の出土は、縄文時代同様、自然堤防上で土に穴を開け根菜類を採集したか、あるいは畑作の作物を植えるための穴を掘るために利用されたものと考えたい。

4. 京都府北部出土の石鍬(打製石斧)と弥生時代遺跡の石器組成

近隣での石鍬(打製石斧)の出土例を追いながら、各遺跡の石器の組成についてみてみたい。なお、石器の組成は集落の場所ごとに異なることが予想されるため、石器の構成がかならずしもその集落全体の評価につながるものではないことも強調しておきたい。

志高遺跡の場合対象となるのは、弥生時代中期後半(Ⅲ・Ⅳ様式)の竪穴住居が7棟検出された居住域の中央付近である。出土の石器組成については、個体数については第1章で述べたが、408点を用途別に示すと、石剣・石鍬(狩猟具としての石鍬を含む。以下同じ。)などの武器類は80点で17.5%、農具類は石鍬29点のみで6.3%、木材の伐採、加工に用いた石斧類は69点15.1%、玉作りの工具も含めた砥石などの工具類は193点57.3%、磨石・敲き石類は37点8.1%である。以下付表2により各遺跡について石器を概観する。

付表2 近隣遺跡ほかの石器組成

地域	遺跡名	総数	石剣	石槍	石鏃		石包丁		石鋏	石斧		敲き石 磨石	石錐	刃器 その他	砥石	台石	玉工具	石錘	時期
					磨製	打製	大型	小型		大型	その他								
由良川流域	志高	408	23	0	9	48	0	0	29	43	26	37	10	2	143	20	18	0	中葉 ～ 後葉
		%	5.03	0.00	1.97	10.50	0.00	0.00	6.35	9.41	5.69	8.10	2.19	0.44	31.29	4.38	3.94	0.00	
			17.51		6.35		15.10		50.33		0.00								
	桑飼上	115	1	0	1	24	1	0	3	11	13	12	5	3	28	7	6	0	後葉
		%	0.9	0.0	0.9	20.9	0.9	0.0	2.6	9.6	11.3	10.4	4.3	2.6	24.3	6.1	5.2	0.0	
			22.61		3.48		20.87		53.04		0.00								
	興・観音寺	111	4	0	2	24	4	1	0	5	15	6	0	1	39	5	3	2	後葉
		%	3.6	0.0	1.8	21.6	3.6	0.9	0.0	4.5	13.5	5.4	0.0	0.9	35.1	4.5	2.7	1.8	
			27.03		4.50		18.02		48.65		1.80								
	興(府)	53	5	0	1	18	0	0	0	4	8	1	1	8	5	1	0	1	中葉 ～ 後葉
		%	9.4	0.0	1.9	34.0	0.0	0.0	0.0	7.5	15.1	1.9	1.9	15.1	9.4	1.9	0.0	1.9	
			45.28		0.00		22.64		30.19		1.89								
青野(A)	58	2	1	3	11	0	0	1	5	11	11	2	0	9	0	0	2	後葉	
	%	3.4	1.7	5.2	19.0	0.0	0.0	1.7	8.6	19.0	19.0	3.4	0.0	15.5	0.0	0.0	3.4		
		29.31		1.72		27.59		37.93		3.45									
支流	ケンケ谷	94	2	1	0	26	0	0	0	3	3	30	4	22	1	2	0	0	後葉
		%	2.1	1.1	0.0	27.7	0.0	0.0	0.0	3.2	3.2	31.9	4.3	23.4	1.1	2.1	0.0	0.0	
			30.85		0.00		6.38		62.77		0.00								
春日七丁目	787	13	0	0	108	300	0	0	62	35	27	20	88	132	0	0	2	中葉 ～ 後葉	
	%	1.7	0.0	0.0	13.7	38.1	0.0	0.0	7.9	4.4	3.4	2.5	11.2	16.8	0.0	0.0	0.3		
		15.37		38.12		12.33		33.93		0.25									
武上庫川城	奈カリ与	176	0	4	6	62	5	0	0	3	8	2	5	67	14	0	0	0	後葉
		%	0.0	2.3	3.4	35.2	2.8	0.0	0.0	1.7	4.5	1.1	2.8	38.1	8.0	0.0	0.0	0.0	
			40.91		2.84		6.25		50.00		0.00								
丹後半島部	日吉ヶ丘	544	2	0	3	93	0	7	1	196	18	45	0	0	171	0	8	0	中葉 ～ 後葉
		%	0.4	0.0	0.6	17.1	0.0	1.3	0.2	36.0	3.3	8.3	0.0	0.0	31.4	0.0	1.5	0.0	
			18.01		1.47		39.34		41.18		0.00								
	途中ヶ丘	128	0	4	0	28	4	19	5	22	4	10	1	4	14	9	3	1	前葉 ～ 後葉
		%	0.0	3.1	0.0	21.9	3.1	14.8	3.9	17.2	3.1	7.8	0.8	3.1	10.9	7.0	2.3	0.8	
			25.00		21.88		20.31		32.03		0.78								
	扇谷	95	0	0	24	0	4	4	0	6	0	27	0	0	23	4	3	0	前葉 ～ 中葉
		%	0.0	0.0	25.3	0.0	4.2	4.2	0.0	6.3	0.0	28.4	0.0	0.0	24.2	4.2	3.2	0.0	
		25.26		8.42		6.32		60.00		0.00									
橋爪	70	0	0	0	1	1	1	0	16	6	22	0	1	12	7	0	3	後葉	
	%	0.0	0.0	0.0	1.4	1.4	1.4	0.0	21.6	8.1	29.7	0.0	1.4	16.2	9.5	0.0	4.1		
		1.35		2.70		29.73		56.76		4.05									
南山城	市田齊当坊	1342	85		22	142	222		2	40	59	10	27	57	129	30	500	0	後葉
		%	5.1	0.0	1.3	8.5	13.3	0.0	0.1	2.4	3.5	0.6	1.6	3.4	7.7	1.8	29.9	0.0	
			14.89		13.40		5.92		45.04		0.00								

(由良川流域)

桑飼上遺跡 桑飼下遺跡の上流1.5kmの自然堤防上に位置する集落遺跡である。府埋蔵文化財センターが調査を実施し、弥生時代中期の竪穴住居7棟と方形周溝墓2基が検出された。^(注11)出土した石器は、115点で、3点の石鋏(第3図13~15)が含まれる。農具は石包丁とされる小片1を含めて4点で、全体の3.5%と少ない。石剣はないものの石器組成は志高遺跡とよく似ている。

興・観音寺遺跡 由良川中流域左岸の自然堤防上に営まれた隣接する2つの集落遺跡。福知山市教育委員会、府埋蔵文化財センターなどによって12次の調査が行われている。^(注12)興遺跡での1992年の府埋文センターの調査では、大溝の一部と竪穴住居1棟などが検出された。大溝からは53点の石器が出土した。集落の縁辺部のためか武器類が24点・45.3%を占め、石包丁、石鍬などの農具は出土していない。1992～1994年に市教育委員会が実施した両遺跡での調査では多数の竪穴住居などが検出され、111点の石器が出土した。石鍬はなく、石包丁が4点出土している(第6図22～24)。武器形石器が30点で27%を占め志高遺跡、桑飼上遺跡に比べて比率が高い。

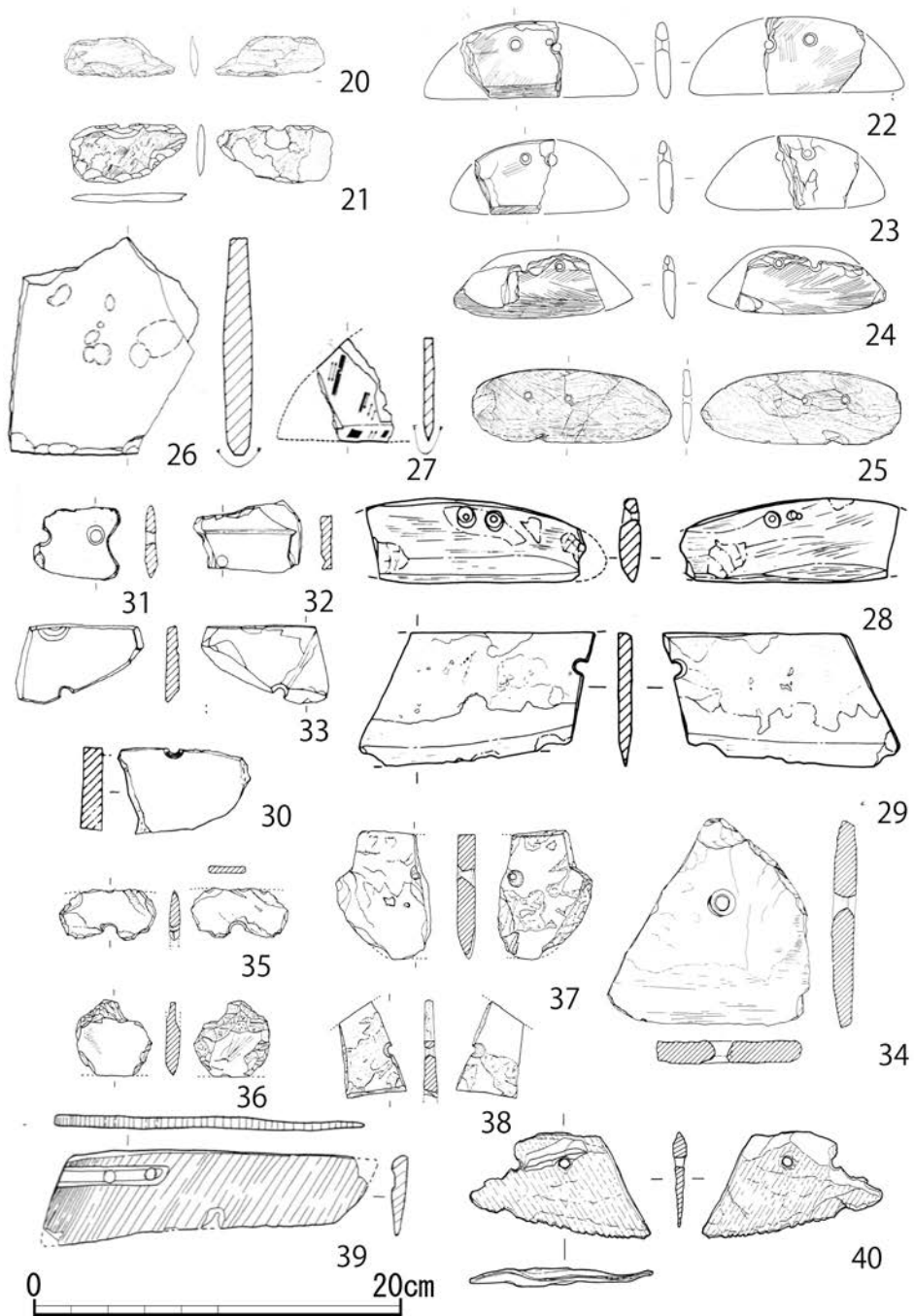
青野遺跡 由良川中流域の右岸自然堤防上に営まれた集落遺跡である。綾部市教育委員会などによって30次近くの調査が実施され、弥生時代中期の環濠、住居跡などが検出されている。表に提示したのは、1972年のA地点の調査である。打製石斧(石鍬)1点(第3図16)が含まれ石包丁はない。1976年の2次調査の報告書には時期の不明な短冊形、撥形の打製石斧(石鍬)5点が掲載されている。なお、その後の調査で石包丁が複数出土(第6図25ほか)している。

ケンケ谷遺跡 福知山盆地の南端、平野部から約30mの比高差がある丘陵上(標高75m前後)に立地する。弥生時代中期後葉の竪穴住居7棟が検出された。^(注14)94点の石器が出土し、その内、武器形石器が30点と3割を超える。農具としては石包丁の未製品とされるものが1点(第6図21)あるのみである。なお、地域は異なるが南43kmほどの武庫川上流域の丘陵上にある三田市奈カリ与遺跡においても、176点の石器中、石包丁は5点で少なく、武器形石器が72点と4割を超えている。^(注15)

春日七日市遺跡 丹波市春日町に所在し、由良川の支流竹田川の上流域の扇状地末端、低位段丘上にある遺跡で、圃場整備や高速道路の建設に伴い春日町教育委員会(現丹波市教育委員会)や兵庫県教育委員会などにより発掘調査が実施されている。この内、兵庫県教育委員会が行った近畿自動車道舞鶴線に係る17,000㎡の調査において、787点の石器が出土した。^(注16)広大な扇状地という性格上、水田経営が行いやすかったのか石包丁が300点と4割近くを占める。石鍬の出土はない。

(丹後半島部)

日吉ヶ丘遺跡 野田川中流域右岸、与謝野町明石の低位段丘上に立地する中期中葉～後葉にかけての環濠集落遺跡である。遺跡は、東西200m・南北250mの範囲で、西側斜面の一部で調査が実施された。^(注17)調査区内からは2条の環濠、竪穴住居跡群、掘立柱建物跡群、方形貼石墓、方形周溝墓群などが検出された。出土遺物の多くは環濠内から出土しており、石器は544点である。打製石斧1点を含む石斧類が214点と4割近く占める。石包丁はな



20 桑飼上遺跡、21 ケシケ谷遺跡、22~24 興・観音寺遺跡、25 青野遺跡、26・27 橋爪遺跡
 28~30 奈具谷遺跡、31~33 扇谷遺跡、34 日吉ヶ丘遺跡、35~38 途中ヶ丘遺跡、
 39 アバタ遺跡、40 谷内遺跡

第6図 近隣遺跡出土の石包丁、大形石包丁、木製穂摘具

く大形石包丁が7点(第6図34ほか)出土している。

寺岡遺跡 日吉ヶ丘遺跡北東2kmに位置する寺岡遺跡では、中期後葉の溝、土壌などから39点の石器が出土している。^(注18)ここでも石包丁はなく、農具としては大形石包丁1点とと大小の打製石斧(石鍬、第3図18・19)が出土している。18は50g、19は660gを計る。大形石包丁の用途については不明な点が多いが、以下草刈り用の農具として論を進める。

途中ヶ丘遺跡 竹野川の支流鱒留川の右岸、京丹後市峰山町長岡の台地上に立地する弥生時代前期から後期までの環濠集落遺跡である。南北340m、東西260mを測る。環濠以外に多数の住居遺構が検出され、128点の石器が報告されており、打製石斧(石鍬)5点(第3図17ほか)、石包丁4点(第6図35～38)、大形石包丁19点^(注19)が出土しているとされる。石包丁と報告されるものはいずれも断片で断定できるものはない。なお、これら農具が29点と2割を超えることが特徴的である。

扇谷遺跡 竹野川中流域左岸、平地との比高差30mほどの京丹後市峰山町杉谷の丘陵上に弥生時代前期末から中期前葉に営まれた環濠集落遺跡である。全長850mに及ぶ環濠の一部が調査され、95点の石器が出土している。^(注20)敲石・砥石などの工具が57点と6割を占める。石包丁4点と大形石包丁4点が報告されているが、石包丁と報告された4点(第6図31～33ほか)はいずれも小片であり、石包丁と断定することは難しい。

奈具・奈具岡遺跡群 竹野川中流域右岸京丹後市弥栄町溝谷には、丘陵上に位置する玉作り工房を含む奈具岡遺跡、奈具遺跡、奈具墳墓群、谷部の奈具谷遺跡からなる弥生時代中期中葉から後葉にかけての大規模集落遺跡が所在する。府教育委員会、府埋蔵文化財センターなどが調査を行っている。この内、水田への取水口が見つかった奈具谷遺跡では、石包丁3点(第6図28・30ほか)、大形石包丁(同29)などが出土している。^(注21)石包丁の存在から谷水田を営んでいたことが推測される。

橋爪遺跡 川上谷川右岸の扇状地上に立地し、高等学校校舎の建設・改築に伴い5回の発掘調査が実施された。第2次調査では、溝内から中期後葉のまとまった遺物が出土している。^(注22)出土した70点の石器では、石斧類と工具が大半を占め武器形石器、農具などがほとんどない。打製石斧(石鍬)はなく、石包丁(第6図27)と大形石包丁(同26)がそれぞれ1点あるが、石包丁と報告されてるものは細片で断定できない。

5 弥生時代における京都府北部の農業生産活動

由良川下流域においては、狭い谷部の自然堤防上に志高遺跡、桑飼上遺跡などの集落が営まれている。両遺跡では石包丁の出土は認められず、農具としての石鍬の出土が目された。両遺跡の間にある縄文時代後期の桑飼下遺跡では大量の打製石斧が出土している。

これを志高遺跡の石鍬と比較したところ、区別はつかず、同じ用途のために製作された道具と考えるのが適当である。これらは、100g前後と軽量の石器であり、鍬として利用するよりも鋤として穴を掘る道具と考えられる。自然堤防上に生える植物の根を採取する道具もしくは、砂地に穴を開け食用植物を植えるための道具と考えられる。同様の道具は、上流域の青野遺跡でも出土しており、自然堤防上の暮らしにおいて共通する生産活動があったと考えることができる。

由良川中流域、上流域の平野部が発達した地域では、扇状地や後背湿地などを利用して水田耕作が行われたのか、少ないながらも石包丁は出土している。上流域の春日七日市遺跡では広大な扇状地を利用した水田経営が成功を取めたのか大量の石包丁が出土しており、同一水系においても農業生産活動に差異が想定される。

由良川下流域同様耕地に恵まれない丹後半島部の弥生時代中期の遺跡についても、谷水田を巧みに利用したと考えられる奈具・奈具岡遺跡群(奈具谷遺跡)を除くと、石包丁の存在は極めて少ない。なお、奈具谷遺跡からは石包丁が出土するとともに、大規模なトチノミ加工遺構が検出されており、コメ以外にも縄文時代から続く木の実による食料生産に依存している状況をうかがえる。

ところで、日吉ヶ丘遺跡、途中ヶ丘遺跡、奈具・奈具岡遺跡群と台地上に営まれた拠点集落が衰退し、人々が小さな扇状地上に居住する後期になると、コメづくりの状況が変わるようである。小さな扇状地上に位置する後期中頃の京丹後市アバタ遺跡、後葉の谷内遺跡からは、石包丁を模した木製穂摘具が出土している(第6図39、40)^(注23)。ようやく丹後地域でも扇状地を利用した水田経営が本格化したのであろうか。

なお、弥生時代中期の由良川下流域や丹後半島部の遺跡に石包丁がほとんど認められないことは、弥生時代前期の志高遺跡、丹後半島部の京丹後市竹野遺跡、与謝野町温江遺跡、蔵ヶ崎遺跡でも同様である。これらの遺跡から出土する弥生土器の壺や甕の底部にはモミの圧痕が残されているものが見られ、弥生文化の伝播とともにコメづくりが由良川下流域や丹後半島部で始まったのは間違いなく、「石包丁がない=コメづくりが行われていない」^(注24)のではないことを付け加えておく。

志高遺跡の石鍬、桑飼下遺跡の打製石斧の実見に際しては、舞鶴市文化振興課に丁寧に対応いただいた。記して感謝する。

(ひご・ひろゆき = 当調査研究センター事務局次長)

注1 由良川河川改修に伴う志高遺跡の発掘調査は、昭和55年度から58年度まで(1～4次)は舞鶴市教育委員会が、昭和59年度から61年度(5次～7次)までは、(財)京都府埋葬文化財調査研

究センターが実施した。

肥後弘幸ほか1988『京都府遺跡調査報告書』第12冊(志高遺跡)(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

- 注2 前掲報告書に記した第5次調査舟戸南地区、第6次調査舟戸北地区の出土石器(石鍬3、石鏃2)の総数。なお、報告書で石包丁の可能性があったとした刃器については、用途不明として除外した。
- 注3 神村透1985「2 石製耕作具」『弥生文化の研究 5 道具と技術I』雄山閣
- 注4 佐原眞1975「農業の開始と階級社会の形成」『岩波講座日本の歴史1』岩波書店
「弥生文化の縄文的要素として、ここで説明を加えておくべきものは、打製石器である。普遍的に各地にみられるものは石鍬のみであるが、石匙(近畿・瀬戸内では稀有)・石錐(北九州では希、近畿では豊富)、土掘具(山陰・北陸・南信)などがある。これらが縄文文化からの伝統をひくことが明言できるのは、石質・製作技術・形態上、縄文時代の石器と一致するからだけではない。弥生時代がはじまるころの東アジア各地では、打製の技術だけで石器を仕上げることはほとんど忘れ去られていたという事実があるからである。」と述べている。
- 注5 平井勝1991「弥生時代の石器」(考古学ライブラリー64) ニューサイエンス社
- 注6 設楽博己2014「農耕文化複合と弥生文化」『国立歴史民俗博物館研究報告』第185集
- 注7 設楽博己2005「東日本の農耕文化の形成と北方文化」『稲作伝来』(先史日本を復元する4) 岩波書店
- 注8 渡辺誠ほか1975『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』平安博物館
- 注9 調査開始まで多くの石器が採集されており、採集品を含む石器の総数は、1307点でその内、打製石斧は1007点である。
- 注10 弥生時代の石鍬の中には、開墾用の鍬先として利用された可能性の高いものもある。和歌山県西牟婁郡すさみ町に所在する立野遺跡では、弥生時代前期の流路(遺構302)から、多数の弥生土器とともに総数は564点(剥片等用途のないものを除く)の石器が出土した、この内、36点が打製石斧である。撥状の形態をした、10cm以下のものから最大で27cmのものまで大きさは様々で、石材は全て頁岩である。遺構302出土の石器の6.8%を占め、報告者は極端に多い傾向にあると記述している。この内、大形の3点は、本来言われるように土掘具(鍬)として使用されたものと考えられるとされており、それぞれ長さ27.0cm、20.5cm、22.3cm、幅11.3cm、8.7cm、13.8cm、重さ1004.6g、438.1g、571.5gである。『立野遺跡-近畿自動車道紀勢線事業に伴う発掘調査報告書-』(公財)和歌山県文化財センター 2013
- 注11 岸岡貴英ほか1993『京都府遺跡調査報告書』第19冊(桑飼上遺跡)(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注12 崎山正人ほか1995『興・観音寺遺跡』(福知山市文化財調査報告書第29集)福知山市教育委員会、田代弘ほか1988「第2章第1節 興遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第17冊(近畿自動車道舞鶴線関係遺跡8次区間)(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注13 鈴木忠司ほか1976「青野遺跡A地点発掘調査報告書」(綾部市文化財調査報告第2集)青野遺跡調査報告書刊行会

- 注14 岩松保ほか1988「(3)ケシケ谷遺跡」『京都府遺跡調査報告書』第10冊(近畿自動車道舞鶴線関係遺跡)(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注15 (財)兵庫県文化協会1983「北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ」『兵庫県文化財調査報告書』第16冊
- 注16 兵庫県教育委員会1990「七日市遺跡(Ⅰ)-2分冊-(弥生・古墳時代遺跡の調査)」『兵庫県文化財調査報告書』第72冊
- 注17 加藤晴彦ほか2005『日吉ヶ丘遺跡』(加悦町文化財調査報告第33集)京都府加悦町教育委員会
- 注18 奥村清一郎ほか1988『寺岡遺跡』(京都府野田川町文化財調査報告第2集)野田川町教育委員会
- 注19 峰山町教育委員会1977「京都府峰山町途中ヶ丘遺跡発掘調査報告書」峰山町教育委員会 1
- 注20 峰山町教育委員会1988「扇谷遺跡発掘調査報告書」(京都府峰山町埋蔵文化財調査報告書第12集)
- 注21 田代弘ほか1994「丹後国営農地開発事業(東部・西部地区)平成5年度発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第60冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 注22 石井清二ほか1981「橋爪遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1981-2 京都府教育委員会
- 注23 藤原敏晃ほか1987「府営圃場整備関係遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第22冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、肥後弘幸1990「国営農地開発事業関係遺跡平成元年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報1990』京都府教育委員会
- 注24 長谷川達氏は京都府北部を中心に石包丁の少ない地域の存在を明確化し、石包丁に代わる農具の存在を求めている。長谷川達2002「稲穂が摘めぬ-石包丁の分布状況より-」『田辺昭三先生古希記念論文集』田辺昭三先生古希記念の会